

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04833

研究課題名（和文）「実生活や各教科等の学習に機能する読解力」育成カリキュラム及び教材の開発

研究課題名（英文）Development of curriculum and teaching materials to cultivate "reading literacy that function in real life and learning of various subjects"

研究代表者

水戸部 修治 (Mitobe, Shuji)

京都女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：80431633

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）： LISUMでの聞き取り調査により、ベルリン市では各教科の教育課程に加え、各教科で育成する読解力とメディアリテラシーに関する教育課程を作成し、6年生段階と10年生段階で身に付けるべき能力を系統的に示していることなどその詳細を明らかにできた。Johann Peter-hebel-Grundschuleにおける実地調査では、児童が課題解決に向けて取り組むとともにその成果をファイリングして蓄積し、以後の学習でも活用しやすくするなどの工夫を行っていることが分かった。読解力育成カリキュラムと国語科「読むこと」の教材開発に関しては、学習評価の在り方、幼児教育との接続の視点から必要な視点を明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国語科で子供たちに育む言葉の力は、日常生活や各教科の学習でも生きて働くものとなることが望まれる。本研究課題では、ベルリン市の各教科等での読解力育成のための教育課程の特徴を我が国では初めて明らかにできた。この知見は、今後我が国の小学校国語科の教育課程の改善を進める際に大きく資するものとなることが期待される。

また学習評価、校内研究、幼児教育との接続といった多様な視点から小学校国語科の学習指導の在り方を検討し、具体的な国語科の単元を開発・提示できたことから、国語科の授業改善にも生きる成果を得られたと考える。

研究成果の概要（英文）： An interview survey at LISUM revealed the following. In the city of Berlin, we have created a curriculum on reading comprehension and media literacy to be developed in each subject. It systematically shows the abilities that should be acquired in 6th and 10th grades.

A study at Johann Peter-hebel-Grundschule found that: Children are learning to work on problem solving. The results are closed in a file and stored, making it easier to use in subsequent learning.

Regarding the development of reading comprehension development curriculum and teaching materials for the Japanese language course "Reading," we were able to clarify the necessary perspectives from the perspective of learning evaluation and connection with early childhood education.

研究分野：国語科教育学

キーワード：国語科教育 読解力 カリキュラム開発 授業改善 ベルリン市のドイツ語教育 学習評価 教材開発 「読むこと」の指導と評価

1. 研究開始当初の背景

国立教育政策研究所の「小学校学習指導要領実施状況調査」では、物語を読んで答える設問において、内容を正確に理解することはできているものの、目的や必要に応じて要約するなどの思考や判断を伴う読む能力の実現状況について課題が見られた。また説明的な文章については、問われたことに対して情報を正しく取り出すことはできているものの、どこを読むのかを目的に応じて判断することについて課題が見られた。(注1) こうした結果からは、(1) 内容を受動的に理解することにとどまらず、目的意識や必要感を持ち、どのような言葉に着目するか、読んだ内容をどのように自分の言葉でまとめるかなど、課題の解決に向けて主体的に文章に働きかけ、思考・判断して読む能力、(2) 目的に応じてどこをどのように読むのか、得た情報をどのように用いるのかなどを考えて読む能力などの育成が必要であると考えられる。こうした読む能力は、児童の実生活や各教科等の学習において必要となる読解力とも言えるものである。そのため、国語科の学習指導は国語科の枠内に閉じるのではなく、実生活や国語科以外の各教科等の学習を支える能力を育成する観点からの授業改善が不可欠である。

本研究課題においてはこうした現状を受け、我が国の小学校国語科の授業改善を図るため、児童の実生活や各教科等の学習において機能する読解力を系統的に育むという観点でカリキュラム作成や、授業改善を具体化する教材開発の視点を明らかにすることとした。

2. 研究の目的

(1) 「各教科等において機能する読解力」の育成に資する教育課程作成の枠組みを明らかにし、日常の読書生活等や各教科等の学習にも機能する読解力を系統的に育成するためのカリキュラム作成の視点を解明する。

(2) (1)のカリキュラムを具体化する、国語科の授業改善を進めるための単元及び教材や評価の在り方について明らかにする。

3. 研究の方法

(1) ベルリン市におけるカリキュラムの特徴及び基礎学校での運用状況の把握と分析

ベルリン・ブランデンブルグ州立学校・メディア研究所(LISUM)を中心とした読解力向上に向けたドイツにおける最新の取組の状況を把握するとともに、基礎学校における具体的な運用状況を把握する。そこで、訪問調査により LISUM の研究担当者から詳細な状況を聞き取るとともに、ベルリン市内の基礎学校を対象に下記項目について現地調査を行うこととする。

授業の視察と分析、実践研究推進教員等からの聞き取り(授業実践上の工夫点の把握)

読解力向上のための学校の教育計画に関する資料収集とその分析(特に教員の組織体制)

(2) 読解力育成カリキュラムと単元開発の検討

小学校国語科のカリキュラム作成及び単元の開発を進める。その際、小学校の授業実践の現状を踏まえた開発とするため、小学校教諭、管理職、教育委員会指導主事等からなるワーキンググループを組織し、検討を進める。具体的な視点としては、次の2点に重点を置く。

小学校のみならず、幼児教育との接続を見通した教育課程の検討

小学校国語科の指導と評価の在り方の検討

4. 研究成果

(1) ベルリン市におけるカリキュラムの特徴及び基礎学校での運用状況の把握と分析

本研究課題の期間中に、3回の訪問調査を行い、以下のことを明らかにした。(注2)

「各教科で取り組む言語能力とメディアリテラシー育成のための学習指導要領」の特徴解明
ア.「各教科で行う言語とメディアに関する学習指導要領」の概要とその構成

ベルリン市及びブランデンブルグ州における 2017 年の学習指導要領の改訂では、各教科で行う言語能力形成のためのカリキュラムを作成した。内容は大きく 3 つに分かれている。序章では、指導要領の内容が概説されている。第 1 章では言語行為能力の構築に関する能力構造が図解され、それぞれについて 6 年生段階と 10 年生段階の到達目標が示されている。第 2 章ではメディアに関する能力について、同じく図解され、それぞれについて 6 年生段階と 10 年生段階の到達目標が示されている。さらに第 3 章では、各学校で取り上げられる具体的なテーマが例示されている。

イ.各教科で行う言語とメディアに関する学習指導要領の特徴

各教科で行う言語とメディアに関する学習指導要領は、各教科を通じて育成する能力を示したものである。教育課程の位置付けとしては、特定の時間を特設するわけではなく、第 3 章に例示されたテーマに関連の深い教科の学習において、関連を図りながら指導することとしている。

この指導要領は、第 1 学年から第 10 学年までの教育課程として用いられている。ベルリン市では基礎学校は 6 年制を取っている。そのため、第 6 学年の終わり、第 10 学年の終わりなど、各校種の最終学年で重点的に取り上げる。また教員研修においても、メディアリテラシー、言語能力の育成など、この学習指導要領に示された内容を指導することができるように研修が進められている。言語能力については、どの教科の担当の教師も言語能力を育成していくのだという意識の高まりがポイントとなる。ベルリンでは移民の背景をもつ子供が多く、言語能力形成が重要な課題となっている。

ウ.「各教科で行う言語とメディアに関する学習指導要領」における言語行為能力の構造

第 1 章では、言語行為能力構築に関する能力の構造が図解されている。その構造図には、言語行為能力の構成要素として次のことが挙げられている。

- ・交流,対話(Interaktion)・受容(Rezeption)・聴解(Hörverstehen)・読解(Leseverstehen)
- ・話すことへの意識(Sprachbewusstheit)・言語産出(Produktion)・話す(Sprechen)・書く(Schreiben)

またそれぞれの項目ごとに、第 6 学年と第 10 学年における到達基準が示されている。例えば、受容のうち、聴解についての第 6 学年の到達基準としては、次のようなものが挙げられている。

○明確に構造化されたプレゼンテーションから個々の情報を識別し、それらを再現する。

エ.「各教科で行う言語とメディアに関する学習指導要領」のメディアに関する能力の構造

続いて第 2 章では、メディアに関する能力の構造が図解されている。その構造図には、メディアに関する能力の構成要素として次のことが挙げられている。

- ・情報(Informieren)・分析(Analysieren)・反映,熟考(Reflektieren)・産出(Produzieren)
- ・発表(Präsentieren)・伝達(Kommunizieren)

またそれぞれの項目ごとに、第 6 学年と第 10 学年における到達基準が示されている。例えば、発表についての第 6 学年の到達基準としては、次のようなものが挙げられている。

○プレゼンテーションの種類を区別し、基本的な用語で長所と短所を明確に説明する。

オ.「各教科で行う言語とメディアに関する学習指導要領」における具体的なテーマ例

第 3 章では、各学校で取り上げられる学習のテーマ例が示されている。具体的には異文化教育、職業、多様性、民主主義、学校における欧州思想教育、健康づくりなどのテーマが取り上げられている。これらは第 1 学年から第 10 学年までを通して取り扱う例示であり、各学年の発達の段階にふさわしいものを取り上げて指導することとなる。

カ.「各教科で行う言語とメディアに関する学習指導要領」の教育課程上の意義

○子供たちに必要な能力の明確な提示

言語能力とメディアに関する能力の2つの側面から、それぞれの能力の構成要素を明らかにしている。また、第6学年及び第10学年における到達基準を明確に示している。こうしたことにより、子供たちに必要な能力を州全体、そして学校全体で共通理解することが可能となる。

○複数の教科を巻き込んだ教育課程の改善

各教科には固有のねらいがあるが、関連する部分もある。それぞれの教科が連携することにより、より効果的に能力を育成することが期待される。また各教科の能力が、言語能力やメディア活用能力とどのように関連するのかについても見通すことができる。

○教師の意識改革の促進

それぞれの教科内容を指導するだけでなく、改めて各教科の内容を見直し、教科間の連携を図り、授業改善を進めることにも機能することが期待される。

ベルリン市の基礎学校における授業実践の分析

ア.訪問調査対象校及び視察授業の概要

ベルリン市内の基礎学校、Johann Peter-Hebel-Grundschule を調査対象校とし、期間中2回訪問調査を実施した。本校は、LISUM と連携して授業開発を行っており、LISUM の提案を受けた実践を行うとともに、多くの実践的知見を LISUM に提供している。訪問当日は Mrs. Claudia Wenzel による低学年のプロジェクト学習の授業を参観するとともに、授業後その学習指導の趣旨や年間を通じた実践の成果などについて聞き取った。

イ. Mrs. Claudia Wenzel による実践の意義 (2018 年訪問調査から)

○プロジェクト学習と関連を図った語彙指導

近年の移民を背景とした子供の増加等により、子供の言語の能力に大きな差が生じている。また ICT 機器の発達により、不正確なスペルでも正しいスペルに自動的に修正されてしまうなど、むしろ言語能力の育成にはマイナスに作用する状況も見られる。今回の授業はこうしたことを背景に、子供たちの語彙力を伸ばそうとする取り組みである。その際、単に単語の意味やスペルを暗記させるといった指導ではなく、現在進行しているプロジェクト学習と密接に結び付けた学習指導を工夫することにより、子供たちが必然性をもって学べるようになっていた。こうした点は、語彙指導の在り方の改善について大きな示唆を与えるものであろうと考えられる。

○育成を目指す能力の明確な把握と共有

語彙指導においては、文や文章の中で用いることができるようになることを指導のねらいとしている。こうしたことを教師が明確に把握するのみならず、それをたとえ低学年であっても意識しながら学習できるように共有を図っていた。学習の中でどのような能力を身に付ければよいのかを意識して学ぶことにより、単なる練習学習や活動のみの学習に陥ることなく、力を高めることができる。

○子供の自立的な活動を促すきめ細かな手立て

「言葉のパス」や「学ぶ道のり」、学習の宣言書などは、いずれも子供たちが自立的あるいは自律的に学んでいくための有効な手立てとなっている。

学習指導に当たっては、子供たちの言語能力の状況に大きな差があるため、一律一斉授業では対応が難しいという現状を踏まえて、子供たち一人一人の進度に応じた学習を組み立てる必要がある。こうしたことに対応するため、個々ばらばらの活動に陥ることなく、見通しをもって学び、力を身に付けていくことができるようにするための有効な手立てとして工夫されたものだと言えるだろう。なお、先述の工夫の他にも、個別の学習の場面においては、教師に質問したい

子どもは、質問受付ボードに、自分の名前を書いたクリップを挟んで意思表示するといった工夫もなされていた。

(2) 幼児教育との接続を見通した小学国語科の教育課程の検討

小学校国語科のカリキュラム改善の視点を検討するため、小学校低学年の指導案を集積した上で、幼児教育との接続を見通した検討を行った。(注3)

小学校国語科「読むこと」と幼児教育の接続を見通した幼児期の手立て及び環境構成の工夫
読むことに関わっては、様々な昔話や絵本、図鑑などを、その特質に合わせて継続的に読み聞かせすることが非常に重要になる。幼児期においては一つの作品を深く味わう以前に、多様な作品の読み聞かせを聞き、多彩なストーリー展開を味わったり、それらの展開に触れて喜んだりはらはらどきどきしたり、少ししんみりしたりするなどの読書体験が極めて重要になる。小学校段階でいわゆる「読める子」は、幼児期にそうした体験を豊富にもっていると推測される。

そこで幼児教育における言語環境構成の工夫としては、幼児が読み聞かせしてほしい作品を選んだり、お気に入りの本を見付けたりできるように、幼児の手の届くところに本などをたくさん用意しておくといったことが一層重要になる。また、読み聞かせを聞いて感じたことや好きなところ、想像したことなどを話したり聞いたりする活動や、図鑑の写真などを手掛かりに知りたいたいことを見付け、読み聞かせしてもらえるようにするという工夫も有効であろう。

(3) 小学校国語科「読むこと」の指導と評価

単元開発の際に、当該単元で育成を目指す資質・能力をどのように指導し、評価するかについて、事例を取り上げて検討を行った。(注4)

指導と評価に当たって次のような点が求められることを明らかにした。

当該単元で指導する指導事項の趣旨を精査し、どのような「読むこと」に関する資質・能力を育むのかを明らかにすること。

その資質・能力を育成するのにふさわしい言語活動を適切に位置付けること。

評価に当たっては、言語活動を行う過程で見られる児童の「思考・判断・表現」等を適切に評価する必要があること。またそのために必要な手立てを精緻に取ること。

(注1) 国立教育政策研究所「小学校学習指導要領実施状況調査教科別分析と改善点等 国語」
pp.3-4, 2015

(注2) 具体的には以下の論文を参照いただきたい。

水戸部修治「ベルリン市の基礎学校段階におけるドイツ語教育の現状」『発達教育学部紀要第15号』pp.47-54, 2019

水戸部修治「ベルリン市における基礎学校段階のドイツ語教育施策とその実践の推進」
京都女子大学『発達教育学部紀要第16号』, pp.41-48, 2020

(注3) 水戸部修治「幼児教育における言葉の育ちを支える手立ての在り方に関する考察～小学校国語科との接続を視点として～」『京都女子大学』教職支援センター研究紀要』第2号,
pp. 31-44, 2020

(注4) 水戸部修治「読むこと(説明文)の指導と評価」, 「読むこと(物語文)の指導と評価」,
「主体的に学習に取り組む態度の指導と評価」(連載), 『実践国語研究』 362, 363, 365,
明治図書, 2020 - 2021

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 水戸部修治	4. 巻 362
2. 論文標題 「読むこと」（説明文）の指導と評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践国語研究	6. 最初と最後の頁 pp.58-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 水戸部修治	4. 巻 363
2. 論文標題 「読むこと」（物語文）の指導と評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践国語研究	6. 最初と最後の頁 pp.58-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 水戸部修治	4. 巻 365
2. 論文標題 「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践国語研究	6. 最初と最後の頁 pp.58-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 水戸部修治	4. 巻 第16号
2. 論文標題 ベルリン市における基礎学校段階のドイツ語教育施策とその推進	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp.41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 水戸部修治	4. 巻 第2号
2. 論文標題 幼児教育における言葉の育ちを支える手立ての在り方に関する考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.31-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 水戸部修治	4. 巻 第15号
2. 論文標題 ベルリン市の基礎学校段階におけるドイツ語教育の現状	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都女子大学「発達教育学部紀要」	6. 最初と最後の頁 pp.47-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------